



ミュージアムパーク

茨城県自然博物館

小さな好きから 大きな夢中へ ミュージアムパーク

A・MUSEUM

【ア・ミュージアム】

2025.9.15

vol.118



CONTENTS

- 1 企画展紹介 どんぐり
— 魅力にはまって さあたいへん♪ —
- 2 特集 博物館職員の活動日記⑧／館長コラム
- 3 研究報告1 鮮新世のカグラザメ属とホホジロザメの化石
／MCの小さな発見
- 4 研究報告2 茨城県の動物・植物の本 総目録
／おさかな通信
- 5 なるほど博物館／収蔵品紹介
- 6 トピックス
- 7 いちおしトピックス！／今後の企画展紹介

「どんぐり」は、広くブナ科の果実を指す言葉です。ブナ科は世界に700種以上、日本に約20種あります。どんぐりは、芽生えて成長すると樹木になり、動物や菌類、そして人間にとっても大切な存在です。

写真：(左上)シラカシの若いどんぐり、(右上)食べられるどんぐり、(右中央)世界最大のどんぐりインシグニス、(左中央)クヌギシギゾウムシ、(左下)ドングリキンカクキン、(右下)コナラのどんぐりの芽生え

第93回
企画展

どんぐり — 魅力に はまって さあたいへん♪ —

会期／2025年10月11日（土）～2026年1月25日（日）

イラスト：栗崎キントン



子どものころから拾って遊び、童謡にも歌われる、身近な木の実どんぐり。その姿や形はさまざまで、発芽して育つと大きな木となり、豊かな生態系を支えます。かつては、私たち人間の食べ物や燃料などの生活の糧となっていました。そんな奥深いどんぐりを、さまざまな角度から紹介します。

どんぐりころころの歌に合わせてつくったオリジナルのストーリーが、みなさんを各展示コーナーへ導きます。きっと、どんぐりの魅力にはまってしまうこと、間違いなし！

（資料課 伊藤彩乃）

第1章

わたしは どんぐりちゃん

お池に落ちてしまったどんぐり
ちゃんはどじょうと会って…



どんぐりってなあに？
どんぐりから根と芽が出て大きな
木が育って知ってた？

第2章

どんぐりちゃんと 森のいきもの

どんぐりちゃんはネズミに
運ばれ土の中へ…



どんぐりの木はいろいろな動物や
キノコとつながっているよ！
どんなつながりかな？

第3章

どんぐりちゃんの なかまたち

どんぐりちゃん、世界中の
どんぐりとダンスパーティー！



日本のどんぐり全種が勢ぞろい！
世界最大のどんぐりも紹介するよ！

第4章

どんぐりちゃん たべられる

どんぐりちゃん、縄文時代に
タイムスリップ！



縄文人はどんぐりをふだんから
食べていたんだ。
今でもどんぐりを食べている
地域があるんだって。

第5章

どんぐりちゃん どうなるの？

どんぐりちゃん、春に
なって芽生えて…



里山では、どんぐりの木がどのよう
に利用されてきたかを紹介しますよ！

どんぐりのお話が はじまるよ！



みなさんは「キノコ」というと、どんなことを想像しますか。昨日まで何もなかったところにぱっと現れたと思ったら、次の日には姿を消していたり、色や形がさまざまだったりして、なんだかミステリアスなイメージをもっている方が多いのではないのでしょうか。

当館では、開館した1994年からずっと野外施設で採集されたキノコの調査を続けてきました。この30年間で見つかったキノコは425種にもなります。しかし、現在そのすべてを観察できるわけではありません。30年のあいだに、マツの木が減少したり、木々が成長したりして、木の根の周りにつくキノコの菌が変化し、そこに発生するキノコも変化してきたのです。

私も当館のボランティアチームとともに、1年間野外施設でキノコ採集を続けてきました。その中で、図鑑を見ても過去の記録を見ても、種類が判別できないベニタケ属のキノコに出会いました。「もしかしたら当館野外施設では初記録になるかもしれない」と思い、私はそのキノコの同定を試みることにしました。

まずは、そのキノコの外見から特徴を探ることからはじめました。すると、ヒダが途中で枝分かれしていることに気が付き、普段から相談している大学の教授に確認したところ、ベニタケ属で枝分かれしているキノコは「ウグイスハツ」のみであることがわかりました。しかし、どう見てもそのベニタケ属のキノコはウ



枝分かれ（赤丸で囲んだ部分）したベニタケ属のキノコ

グイスハツには見えない形と色をしていました。

図鑑をくまなく読んでいくと、ニセムラサキハツというベニタケ属のキノコに気が付きました。図鑑の特徴からは、色、形、そしてヒダの枝分かれまで特徴が一致していました。そこで、次に、胞子や細胞の一部について、顕微鏡を用いてより詳細な観察を行いました。その結果、そのベニタケ属のキノコは図鑑に載っていたニセムラサキハツの特徴によく似ていることが明らかになりました。ニセムラサキハツだとすれば、当館野外施設では初記録になります。

しかし、ここで新たな問題に直面しました。これまでキノコについて、世界中で長い歳月をかけて研究がされてきましたが、ベニタケ属はまだ研究途上で未解明な部分が多い状態にあります。ニセムラサキハツもその一つであり、まだ学名がついていないベニタケ属の一種 (*Russula* sp.) なのです。

残念ながら現時点ではまだニセムラサキハツだと断定はできませんが、そんな未解明のキノコが当館の野外施設に生えていたこと、そして今私の手の中にあるということにロマンを感じています。今後ベニタケ属の研究が進み、このキノコに学名が付くことを楽しみにしています。



野外施設に生えるベニタケ属のキノコ

キノコ以外にも、同じように世の中には未解明で研究途上のものはたくさんあります。そんな誰にも知られていない謎に出会うのは、とてもワクワクすることではないでしょうか。（資料課 櫛引豪人）

館長コラム by director Yokoyama 私の目標

毎年、全国の自然史系博物館の館長が集まり、それぞれの館の現状や課題について意見を交わしています。この集まりは各館の持ち回りで開催され、常設展示や企画展の見学を通して、その館ならではの工夫や特徴を実感できる貴重な機会にもなっています。

話題として挙がるのは、収蔵庫の不足や施設の老朽化、雨漏りといった設備面の課題に加え、温暖化や電気料金の高騰への対応、組織体制の見直しなど、どの館にも共通する問題ばかりです。なかでも、新しい収蔵庫をつくった博物館があったり、大規模な展示のリニューアルをした館があったりと、非常に興味深い事例も紹介され、当館としても今後、検討していく上で大変参考になっています。

当館は開館から30年が経過し、施設面を含めさまざまな課題があります。それらに対応するためには「マンパワー」が不可欠ですが、決して多くない職員で何とか運営しているのが現状です。職員を増やすことがなかなか難しいこともあり、職員のモチベーションを下げないために、一人一人がやりがいをもって働ける職場環境にすることが大切だと思っています。

私の目標は、現在と同じくらの人数のお客様に来ていただくこと、そして当館で働く人たちが、ここを離れる際に「博物館で働けてよかった」と、心から思えるような職場をつくることです。

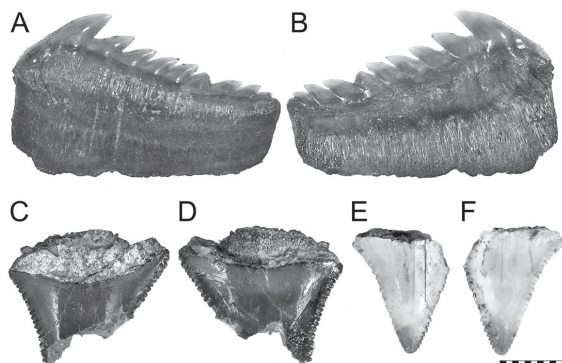


鮮新世のカグラザメ属 とホホジロザメの化石

茨城県日立市の海岸に分布する“初崎層”とよばれる地層から産出したサメの歯の化石についての論文を当館の研究報告に掲載しました。見つかったサメの歯は、深海にすむカグラザメ属の一種と、海の表層～中深層を幅広く移動するホホジロザメの歯です。これらは現在から約350万～410万年前の新第三紀鮮新世という時代のものです。

カグラザメ属の歯は長さ4.2cmと大きく、1列に並んだ多数の鋭い突起をもちます。保存状態が非常に良いことから、“初崎層”が堆積した深海に生息したサメの歯だと推測されます。このサメの全長は約5.5mだったと推定され、確認されているカグラザメ属の最大サイズに匹敵する大きさです。この歯の近くからはクジラ類の骨格も見つかっており、その死骸を食べていた可能性があります。

一方、ホホジロザメの歯は三角形で、縁がギザギザしているのが特徴的です。かなり摩耗していることから、浅い海域から流されてきたものと推測されます。



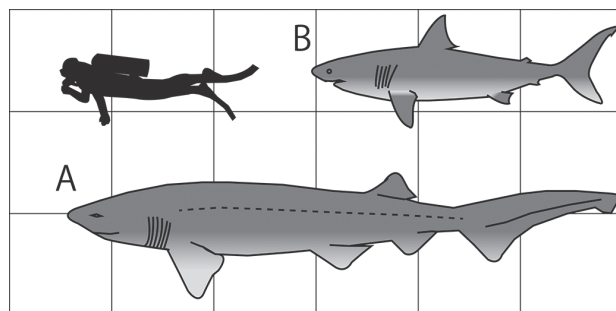
カグラザメ属の歯 (A-B) / ホホジロザメの歯 (C-F) .スケールバー: 10mm

歯の大きさから体長3m程度の亜成魚の歯だと推測され、当時この海域にいたクジラやアシカなどを餌にしていたと考えられます。

日本の鮮新世の地層において、大型のカグラザメ属の歯とホホジロザメの歯が共に産出するのははじめての事例です。これらの化石は、鮮新世の北西太平洋において、大型のカグラザメ属とホホジロザメが共存しており、それぞれ異なる水深にすみ分けながらクジラやアシカといった海生哺乳類を捕食する生態系が形成されていたことを示しています。大昔の海の生態系を知る上で、とても貴重な手がかりとなりました。

なお、“初崎層”は、日本でも特に長い化石研究の歴史をもつ地層です。旧東京大学理学部地質学科の第二期生であった巨智部忠承が“初崎層”の貝化石を調査し、1883年に日本人として初めて化石に関する論文を出版しました。近年では我々が新種のクモヒトデ (A・MUSEUM 111号掲載)、ナガスクジラ科やアシカ類などの海生哺乳類 (A・MUSEUM 113号掲載) の産出を報告しています。今後も調査を継続し、面白い研究成果をお届けしたいと思います。

(資料課 加藤太一)



カグラザメ属 (A) とホホジロザメ (B) の推定サイズ

論文：加藤太一・吉川広輔・森田直樹・村上瑞季・中島保寿・高桑祐司. 2024. 鮮新統日立層群“初崎層”から産出したサメ類 (カグラザメ属およびホホジロザメ属) の歯化石. 茨城県自然博物館研究報告, (27): 1-9.



ミュージアムコミュニケーター

MCの小さな発見

アカウミガメについて

アカウミガメは、温帯から熱帯の海に広く生息するウミガメの仲間で、日本国内に複数の産卵地が確認されています。寿命が長く70年前後生きると言われていて、古くから縁起の良い生き物として親しまれてきました。

そんなアカウミガメですが、近年個体数が大きく減少しています。国際自然保護連合 (IUCN) や環境省のレッドリストに掲載され、絶滅が危惧されています。日本は、北太平洋における唯一の産卵地とされているため、産卵に利用される砂浜の保全など、日本の保護活動が重要になっています。

当館の第5展示室では、アカウミガメを含む絶滅が危惧されるさまざまな動植物や身近な環境問題を紹介しています。ぜひじっくりとご見学ください。

(ミュージアムコミュニケーター 原田紗里)



第5展示室に展示されているアカウミガメのはく製

茨城県の動物・植物の本 総目録

ある地域に生息する動植物について調べるには、多くの文献にあたる必要があります。学会や博物館などの学術雑誌に掲載された論文を調べるにはさまざまな検索ツールがありますが、自治体や団体が刊行する書籍や調査報告書、地域の同好会誌などの文献まで広く調べるとなると容易ではありません。

2012年に千葉県に関する文献をまとめた「千葉県の動物と植物の本 総目録」が刊行されました。その編者である三沢博志氏を紹介いただいたのを機に、茨城県の生物に関する文献の収集がはじまりました。当初は三沢氏と当館職員（当時）の小幡和男氏と私の3名だけでしたが、その後、茨城県生物多様性センターの関係者や本県の生物に精通した専門家も加わり、「茨城生物文献調査会」（代表：山根爽一）が発足

しました。そして、各方面の専門家の協力も得ながら文献を追加し、本年、本調査会と協働して本県の動植物の文献をまとめた「茨城県の動物・植物の本 総目録」を当館から刊行しました。

本書は本県の生物に関連する863点の書籍や報告書などの文献が、生物群ごとに収録されているだけでなく、文献の解説も加えられています。また、書名・著者・編者・監修者名のほか、地名・地域名の索引もあり、本県の生物関係の文献についてさまざまな観点から調べられるよう工夫が施されています。

また、今回収録した文献の中には、『蝶譜』（1978）をはじめ、『老樹銘木誌』（1928）や『筑波山植物目録』（1932）など、本県の自然史研究の基礎となる貴重な文献も収録されています。

今後、生物多様性保全の基礎資料として、一般の方々、学校、博物館、自治体の関係者に活用していただけたら幸いです。（資料課 池澤広美）

生物群ごとの掲載文献数

章 名	掲載文献数	
	茨城県版（千葉県版）	
I 生物全般	350	(359)
II 動物全般	37	(26)
III 哺乳類・鳥類	48	(155)
IV 爬虫類・両生類	5	(11)
V 魚類	44	
VI 昆虫類	128	(31)
VII その他無脊椎動物	22	
VIII 植物・菌類	229	(252)
(水生生物)*		(100)
合計	863	(934)

※千葉県版では「魚類」と「その他無脊椎動物」はないが、「水生生物」という章がある。



表紙（オオカマキリ、シロモンノメイガ、ナミハナアブ、ユウガギク）（左）と「I 生物全般」の中扉（タコノアシとナツアカネ）（右）
（イラスト：本田尚子氏）

茨城生物文献調査会（編）. 2025. 茨城県の動物・植物の本 総目録. 167 pp., ミュージアムパーク茨城県自然博物館.

本書は公益信託「エコーいばらき」環境保全基金の支援を受けて製作しました。

おさかな通信

春と秋はタナゴをご覧あれ

当館の第3展示室「湖沼の水槽」では、タナゴのなかまを展示しています。タナゴのオスの体色は産卵期には色鮮やかで美しい“婚姻色”に変わりますが、これはメスの注意を引くためと考えられています。日本在来のタナゴでは春に産卵する種が13種、秋に産卵する種が3種確認されています。

タナゴには生きた二枚貝のえらに卵を産み付けるといった珍しい習性があります。卵は貝の中で外敵から守られるだけでなく、貝の呼吸によって常に新鮮な水が供給されることで、稚魚が泳げるようになるまで安全に成長できます。

当館の水槽でも、非常に美しい婚姻色が現れたタナゴのなかまを見られる時があります。春にはヤリタナゴやタイリクバラタナゴが、秋にはカネヒラやゼニタナゴが見頃です。花見ならぬ“タナゴ見”をしてみたいいかがでしょうか。

（水系担当 三好 翼）



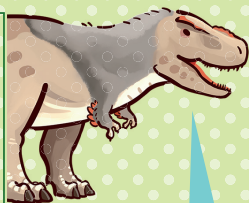
婚姻色が少し現れたヤリタナゴ
春になるとさらに色鮮やかになります

なるほど 博物館

いばレックスとコティランが
自然に関する情報を
わかりやすくお伝えします。

日本のどんぐり

(教育課 豊崎賢二) イラスト:ツク之助



オキナワウラジロガシ

これは沖縄に分布するオキナワウラジロガシで、日本最大のどんぐりなんだ。最大で高さも幅も3.5cmにもなるんだよ。

わあ! 左のどんぐり、とっても大きいね!



コティラン

へ〜。じゃあ、日本最小のどんぐりはどのくらい小さいの?

日本最小のどんぐりはツブラジイで、高さも幅も最小で0.8cmくらいしかないんだ。関東地方から西の地域に分布しているんだ。



ツブラジイ

小さくてかわいいどんぐりだね! 日本のどんぐりってどんななかまがあるの?

どんぐりのなかまを見分けるにはどこを見るといいの?

パンツで見分ける…面白いね! あと、クリってどんぐりなんだね! どんぐりはみんな食べられるの?

へ〜そうなんだ。ぼく、どんぐりのことをもっと知りたくなってきたよ!

どんぐりはブナ科の樹木の果実のことで、大きく5属に分けられるよ。身近に見られるコナラやクヌギなどのコナラ属、マテバシなどのオニガシ属、スダジイなどのシイ属、ブナなどのブナ属、そしてクリ属があるんだ。

一番注目してほしいのは「殻斗」だね。「帽子」や「パンツ」などとよばれているよ。種類によって形や模様が違うんだ。例えばコナラはつぶつぶ模様、シラカシはしましま模様。クヌギはもじやもじや。



つぶつぶ



しましま



もじやもじや

スダジイやブナなどは渋みがなくそのままでも食べられるよ。でも、コナラなどは渋みが強くてそのままでは食べられないんだ。縄文時代では渋みをとる工夫をしてどんぐりを食べていたと考えられているよ。

収蔵品紹介

メゾンクリークで採集された植物化石

当館で収蔵している化石コレクションの中には、同じ産地で採集され共通の特徴をもつコレクションがいくつかあります。今回紹介するのは、アメリカのイリノイ州にある化石産地メゾンクリークで採集された植物化石コレクションです。この産地の特徴は、地層中の球状の塊の中から、魚、エビ、昆虫、クラゲや植物などの化石が見つかることです。やわらかい組織をもつ生き物たちも多く残っており、約3億年前の生態系がわかる貴重な化石産地です。

このように内部に化石を含む丸みのある塊を、球状コンクリーションとよんでいます。その成因は長い間謎でしたが、名古屋大学の吉田英一教授がその謎を解き明かしました。吉田教授によれば、生物の肉質部(動物の場合)から放出された炭素を含む化合物と地層中のカルシウムイオンが反応して炭酸カルシウムの壁ができ、内部の生物が化石となって保存されるとのことです。植物の場合も同様に植物体から出た炭酸化合物が関係していると思われます。コンクリーションの大きさにもよりますが、形成速度は数週間から数年と、堆積岩ができる速度とは比較にならないほど速いのも化石の保存の良さに関係しているようです。

(教育課 滝本秀夫)



メゾンクリーク産の植物化石

トピックス

①

ジュニア学芸員と「ベビーカーツアー」を行いました！

6月15日(日)、当館ジュニア学芸員の1期生であり、現在は日本大学で博物館学の研究者として活躍する内海美由紀さんをお迎えし、共同研究としてジュニア学芸員有志と「ベビーカーツアー」を実施しました。常設展示室内では職員の子どもやぬいぐるみを乗せたベビーカーをジュニア学芸員に押ししてもらい、子どもの反応や通りにくい場所があるかどうかを体験してもらいました。また、ベビーカーにビデオカメラを取り付けて撮影した映像を皆で鑑賞し、展示室が子どもの目にどのように映っているかを疑似体験しました。その後、ベビーカーを利用する親子に向けた展示キャプションを考え、展示室で発表会も行いました。参加したジュニア学芸員からは、

「赤ちゃんの視点をはじめて知ることができ、よりよい博物館にしていきたいと思えた」「歩いていると普通の通路でも、ベビーカーには大変な所が多いと実感した」などの感想が寄せられました。当館にとってもジュニア学芸員にとっても大変有意義な日となりました。

(教育課 鵜沢美穂子)



ベビーカーツアーのようす

トピックス

②

「教員のための博物館の日」を実施しました！

本イベントは、学校の先生方に博物館に親しみを感じていただき、その豊富な学習資源について理解を深めていただくことを目的として企画されました。

当館では8月1日(金)に実施し、提供する講座は、「授業のための土壌動物基礎講座」(動物)、「授業のためのコケ基礎講座」(植物)、「雲の観察と天気図の歴史」(地学)の3コースからなり、参加者にはその中から一つを選んで受講してもらい、さらに、各講座での体験活動に加え、団体利用や講師派遣、教育用貸出資料など、多岐にわたる相談を自由に受け付ける時間も設けました。

参加された先生方は、時には熱心な表情で学び、また時には楽しげな笑顔を見せながら活動され、大変有意義な時間を過ごされたことと思います。

本イベントでの経験を通じて、学校の先生方が今後ますます博物館を気軽に活用され、それが児童生徒の学習支援のさらなる充実につながることを心より願っています。

(教育課 成田 昭)



「授業のためのコケ基礎講座」のようす

トピックス

③

友の会会員限定イベント 昆虫観察会「あつまれ 昆虫てんこ盛り」

友の会では、7月25日(金)、博物館動物研究室の2名の講師と、当館ボランティア昆虫チームのみなさんの協力を得て昆虫観察会を室内で実施しました。セミの鳴き声で種類を当てたり、抜け殻でオスメスを判別したり、体のしくみをよく観察してスケッチしたり、扱い方を学んでから生きている昆虫に触ったり、ハチの巣を解体してみんなで観察するなど盛りだくさんの内容でした。まさに昆虫てんこ盛り！実際に生きているトンボやバッタ、チョウやイモムシ、カブトムシやクワガタに触ってみた時の表情は、得意満面の顔、緊張気味の顔などいろいろ。この特別な体験が昆虫への興味と関心をさらに深めるきっかけとなってくれたらうれしい

です。友の会に入会すると、会員限定イベントへの参加や、会報発行、ショップやレストランでのお得な特典もいろいろ。この機会に友の会に入会して、一緒に博物館を楽しみませんか？入会をお待ちしています。

(企画課 池田洋子)



友の会イベント昆虫観察会のようす



「茨城の昆虫たち」の発刊

当館では、長年にわたり、動物・植物・地学の各分野での調査・研究を続けています。昆虫分野では、その成果として、県産昆虫類515科9,568種をまとめ、「茨城県産昆虫目録」を昨年末に発刊しました。しかしながら、この目録では昆虫たちの生態を紹介できず、茨城に生息する昆虫たちの姿を感じ取ることはできませんでした。

そこで、茨城に生息する昆虫119種を取り上げ紹介したのが「茨城の昆虫たち」です。“さまざまな環境にすむ昆虫”、“知っていてほしい昆虫”、“興味深い暮らし”の章では、茨城に生息する昆虫の種の解説を、“昆虫と学ぶ”の章では、さまざまな立場で昆虫相を調べている研究者の報告を掲載しています。種の解説として大きな生態写真に、県内での生息地や生態を詳しく付して紹介した書籍はこれまでになく、図鑑としてだけではなく読み物としても満足いただけるものと思います。地方の自然博物館にとっては、その地域にどんな昆虫が生息してるかをまとめ、一部ではあります

が、その生態を紹介できたことの意義は大きいと思います。

茨城の大地に生息する昆虫たちの生き様を感じていただき、自然を理解する一助になれば幸いです。

(資料課 久松正樹)



茨城の昆虫たちの表紙(左)と種解説のページ(右)

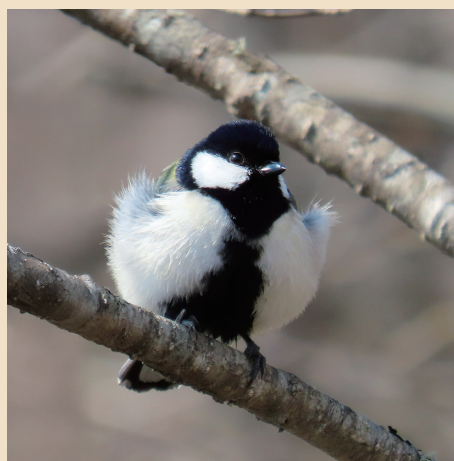
今後の企画展紹介

鳥の世界へようこそ！ ～ 知れば 知るほど おもしろい ～

2026年2月28日(土)～2026年6月7日(日)

鳥は地球上に1万種以上が生息するといわれ、大繁栄している生きものであると同時に、私たちが目にする最も身近な動物の1つです。そんな鳥には、自然の世界で生き抜くための研ぎ澄まされた姿や行動のヒミツがあります。本企画展では、鳥の形態や生態、人との関わりなどに注目しながらたくさんの鳥たちを紹介します。美しい標本を見ることはもちろん、鳴き声を聞いたりするコーナーも予定しています。カッコいい鳥、かわいい鳥、おしゃれな鳥など、多種多様な鳥たちの魅力をたっぷりと味わってください。あなたのお気に入りの鳥も見つかるかもしれません。さあ、魅力あふれる鳥の世界へ飛び立ちましょう！

(教育課 佐野拓哉)



羽毛の間に空気を蓄え、丸々としたシジュウカラ

編集 後記

散歩の途中や通勤・通学の道すがら、よく目にするとどなり、実は自然界のすごい存在だったんです。次回の企画展は身近すぎて気付かなかったどなりの魅力をぎゅっと詰め込んだ企画展です。足もとに広がる、小さな自然の物語をどうぞ。

(S.K.)

【開館時間】 9:30から17:00まで (入館は16:30まで)

【休館日】 毎週月曜日

※休館日は異なる場合がありますので、事前にホームページ等でご確認ください。

URL <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>



ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会

入館料が無料 & 限定イベント多数！

家族会員 4,000円 個人会員 3,000円
子ども会員 1,000円 賛助会員 10,000円

※特典：イベントへの参加、ショップ・レストランでの割引

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しみ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。